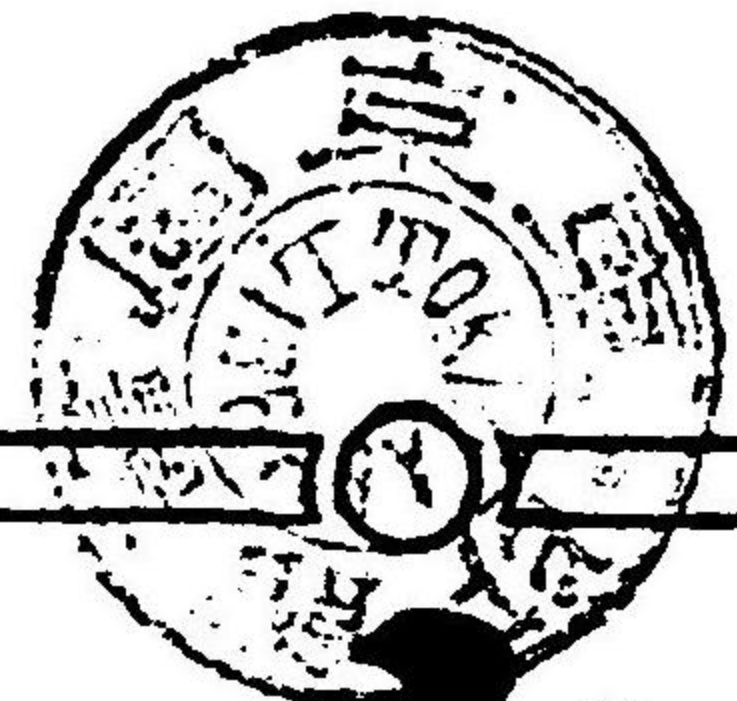


特 55

W.E. 1

263



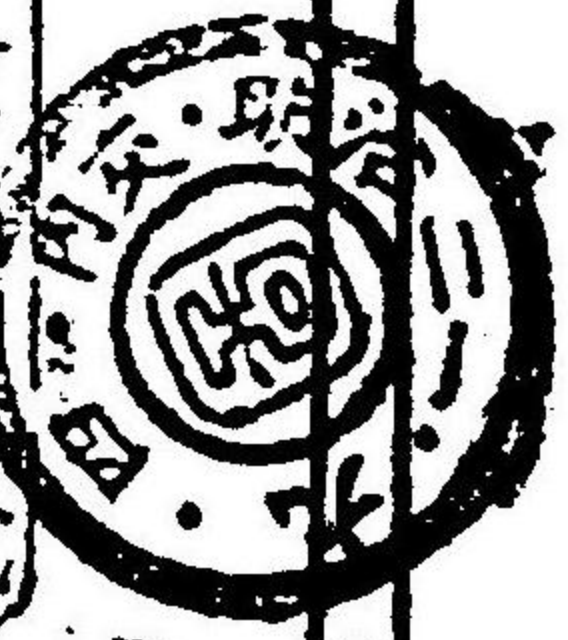
# 安心淨土のたぎ註釋

一名佛法ちよほぐれ

闡提老翁 白隱禪師述

大行寺僧都 正定閣信曉註釋

定價五錢



京都書林 澤田文榮堂版

白隱和尚畧傳

師名ハ惠鶴號ハ白隱駿河原の人あり幼少き時より僧の地獄の苦患を説き聞て大に恐怖し是より出離を求むる心あり遂に邑の松蔭寺に入り出家すあるより東西に行脚して志きりに耆徳の門まうかふ後信列の正受老人に参りて身心を打失す悟後の修を修して大に宗風を振ひ門下に十餘員の智識を得たり實に近世の活僧あり明和五年十二月十一日寂す壽八十四 勅して神機獨妙禪師と謚す

安心ほころびたき註釋

關提老翁 白隱禪師述

大行寺僧都 正定閑信曉註釋

歸命頂禮御釋迦如來、やましく皆さん聞てもくんわく  
あつが親父を、何處のお人か悉多太子久知らぬが佛の  
若い時うら商ひ好びて親の讓の家も位もすぼんと打  
すて、十九の年の山へはらうて、阿羅邏迦蘭の二人の  
仙人師匠と頼みて、菜摘水汲薪を携へ奉公勤めり元  
手まろしうへ十二年目に初めて店出し華嚴と名けり

結搆を代呂物賣てみられど、文珠普賢の二人は買たら、  
 餘り高くて、其餘のお客は盲か聾の見向もせぬゆゑら  
 註ふ曰く十九出家三十成道初頓華嚴日照高山の七  
 處八會の説法にて、三界唯心染浄同體心のほかに別  
 法なく佛と衆生と差別あることの佛説にて、そは眞智  
 本覺圓明の妙覺果満とて、唯佛與佛の智見談  
 あるがゆゑ人に果分不可説乃法門あまは因入たる輩  
 にあつては、聾のふと、啞のぶとと、舍利弗も満願  
 子もそは頓教に入かたのうらうらとあり

是るんゆゑと分別仕替て鹿苑町へと宅替めされて、  
 阿舎と名けし安物賣のけ口上捨き、店先せわしくお  
 客がくるやう得意が付やら

註ふ曰く聽衆より華嚴の會座を立去て、山の麓の鹿  
 の住ける鹿野苑まで逃たるを追ひけ留て長阿舎中  
 阿舎雜阿舎増一阿舎の小衆教する、苦集滅道の十六  
 行相を説たゆくり、春日龍神の謠にて、小機せきの衆生  
 の益あまきをゆかりとたゆふ御姿瓔珞細懐乃衣をぬ  
 ぎ鹿幣三衣を着しつゝ、四諦のまゆりき説たまひし

鹿野園もあくなれやと猿樂歌の文句とれなり

そこで追々代呂物仕入て商ひ手廣み方等般若に法華  
や涅槃とお客の機を見てそましくあてがふ商ひ上手  
に須達長者と呼らく金持とあらふ惚こみ

註ふ曰く一代佛教の多門ありてまろくあれども  
説のごとくに行ずれば解脱をうるあり法相宗のご  
とまろく有空中の三時教をたたく阿含等の小衆を有教  
とく諸部の般若を空教とく華嚴深密等の諸大衆經  
を中道教とく唯識唯心の一理を成して轉迷開悟

す三論宗のぶとまろく二蔵教をたたく聲聞蔵を小衆  
とく菩薩蔵を大衆とく生滅去來一異断常の見をえ  
おまろく八不の正觀み達するを佛果とす俱舍宗のご  
ときら俱舍論三十卷を本論とく断惑修道の相を  
明すに聲聞の四諦を觀ト三生六十劫ありて四向四  
果をうる縁覚の十二因縁を觀ト四生百劫の修行を  
へろく八相成道するご談するあり成實宗のごときら  
三衆の道位をあらすお七賢七聖の位を判ト十八有  
學九無學の二十七賢聖の位をたて小衆中にわいて

空門を明せる宗あり

祇園精舎と名高の屋敷を、お釈迦ふあてづひ大店開け  
ば、早速其名が諸方へ廣がりどつもあひ程商ひ繁昌  
天上天下に一人の親玉譽てもくもわん

註に曰く四月八日誕生の時一指を天よさ一人一指を  
地よさして天上天下唯我獨尊三界皆苦我等安之と  
とあへたまひしをつぐりたる文言あり

その時賣出す妙法の精薬法華の一法盛んに流行て、お  
若い嬢さん龍女と申ぐ之を買うけどろくろ呑込成佛

おされと

註に曰く龍女成佛の法華經の第五卷女人の五障を  
を説たまひし提婆達多品あり娑竭羅龍王の女八歳  
よなりその忽然の間に成佛せしを變成男子具菩薩  
行即往南方無垢世界座寶蓮華成等正覺と説てり  
これなり

あうし此人文珠の化物智慧がらるわんさうりも開け  
た我等が鼻とんどあらい違ひだ

註に曰くあまのつくとん實類の衆生をりん竜女の

おのり多しりくま

権化の人あること、法華經の諸未註以て、分明あるま  
とあり

又々其時韋提希夫人と申せし女中ハ智慧も元手もさ  
つばうなるのに阿闍世と申して不孝ホ御太子提婆達  
多と心を合せて、親もお釈迦も仕舞てのけろと、頻婆沙  
羅王牢屋へまゝ込憂目も合せし、そとで韋提へ不樂闍  
浮と、此世を厭ふてわたしのやうあり、五障三從重き病  
ひの直る薬が、あるある下されお願ひますと、お釈迦  
に向つて、遙うにたのめハお釈迦ハ合点五三の桐だよ、

此様おお客が、大のころふと己前父君淨飯大王其外  
一門勸め吞せて、極樂浄土へ送り届け、秘密の妙方甘  
露で煉りげ平等大悲乃大事の奥の手、大切も此ゆへ、四  
十餘年のなすの月日まお蔵へ納めて、たしおま置たが、  
さうバ是のら賣切けま志ゆつと、法華の商ひ、いばらく  
休みて、阿難目連二人の手代を左右にめし連れ、王宮さ  
しこゝ出現おされて、韋提希夫人ハ彌陀の本願他力乃  
念佛五劫兆載思惟の薬味ハ、諸佛菩薩や、六度の行中、  
一つに合せし六字の九業一向專念男ハ女ハ、産前産後

もや合とさむぬ智慧元手もさるばるいふあひ口  
 にまりせめて唱ふるをうりだどうで其方ハ心想事成未  
 得天眼智慧が強弱で元手の足らふいお脈も見ぬ  
 三毒重病まいて難治の極重惡病是くの志にり是より  
 外に用ふる薬ハ決してふいぞとが勸えおさきと章  
 提元より五百の侍女まで無始よりこのかゝ積り  
 罪業煩惱疑惑の積氣の持病に三世の諸醫師も是を扱  
 たる大病あり一其場で現益阿耨多羅く汗が流れ  
 て即日平愈何とみあさん六字の九藥不可思議妙法梵

語をそのまゝ用ひてみあさん元手のつらぬ肝心要  
 りだ餘り無造作で祖父婆々だまの古代呂物かち  
 つくり疑がひ何ぞ利口お物のなういと知識不問た  
 直指人心見性成佛が釈迦が即ち堯爾と笑へば迦葉  
 がいつこと笑ふと受賣是が本法一嗣相傳ざりの眼  
 を開いて見たまふお釋迦も我等も是ハ何物本来面目  
 無一物といはたりや又どあふの堀出ものだと座禪を始  
 めてやうがけまいたが膝がぶくぶり付ますやう  
 睡がくくやう背中さどやされ大まふお目玉爰が何で

も辛抱どころろと氣張て見よきん三年昔に隣へお  
たの黒豆三合糠一升思ひ出して忘念山へ是も我等  
が是でいりあひどめで我等が

註ふ曰く去の跋ハ靈山法華の會座を没して王宮に  
降臨して觀經を説きたる法華念佛同時の義をいふ  
たるものあり次に禪法の成トがさまとつくも頭  
淨土方便化身土文類の六に善導大師の定善義を引  
て立相住心尚成ト難ト何に死や無相離縁とやとい  
る虚空小舎を立るたといふごとく達磨の傳法ハ教

外別傳にして文字をたてずたゞ心地ハ修行して本  
來の面目をすまのり自己の本念をいふすを成佛手  
商賣音ふと真言秘教さどの様ぶ物だと尋ねて見られ  
や阿字本不生で自身の胸みも阿字ヲ備けり羅字ハ元  
より差別と分きて五智も五大もこの胸一つで父母の  
腹から生れし處ハ金胎兩部の大日法身直に佛の位で  
んすしと聞よりそのまゝあんにほまやべいとやりか  
けしきども元手も持すに自力の商賣しを見るやうな  
るばるばるに阿字や羅字やさらさらなり知らず



ひそそで圓頓妙法蓮華の即身成佛さても無上の妙劑  
 あまもども九讀解行の我等が下根不及びもあひ故題目  
 をのりの看版くらゐのふや出る息づりて、功能のふら  
 る元手があいうふ丸でん買まふ、四十餘年の未顕真實  
 何の事ぞと尋ねて見とまば、六字を廣げと法華經八軸  
 故に六字の法華の肝要な經の畧はと藥王品に、妙典  
 八軸春ふむ時ひん、西方極樂阿彌陀の淨土へ生きて行  
 ぞと説てのりぞや、何も勘定廻りて遠道せうより、  
 踏銀のりふあひ、南無阿彌陀佛ですぐふ往のふ一げん

近みちぢんと皆きんぞうでんあいうへ

註 曰く妙法蓮華經第七卷藥王菩薩本事品第二十  
 三のところに○如來滅後五百歲中若有女人聞是經  
 典如說修行於此命終即往安樂世界阿彌陀佛大菩薩  
 衆圍繞住處生蓮華中寶座之上 文とある佛説を

まんごらるぞへみおさんまゝわへ鼠ころもで夕飯く  
 はずよ二食で暮して戒行のりつ、始末勘畧利口お算  
 用、あつて我等へ、蚕も虱も取らばねや置かへ手まが出  
 して盗みらせねども心にほくして錢金持て、鼻もあ

けまば子種こごねヲおくらむ嘘うそも少すくしハつかねをあらぬ  
 酒さけものまわバ嫁入よめいれ婚いとリ振舞あそびその外世間あまのよガ渡わたりぬ何  
 と是これでん五戒ごがいも持もてぬこそん尚なほさる買かてらすくあひ  
 店みせのさびるガ世よ界このたぢぶよこそまがをやりて賣うり  
 がるあ息子あしこも比ひ丘かさまむすめも尼あまさまむ役所やくじよや  
 く坊主ぼくしゆりこまで田地でんちも作つくらば酒屋さかやもあけまバ和尚あしやうよ  
 嫁入よめいれの媒酌あひあひもりるまひこそまでん世間あまのよお人種ひとねもくら  
 人間にんげん世界せかいがつぶさくくまふぞとも我等われらに自ま力りきのり  
 きあひしやうと思おもへど根氣ねいきと元手もとてガあくてん出で來まる

い

註しゆに曰いくよの段だんハ律宗りつしゆをりぬたるそのあり律りつハ三  
 藏さんざうのあらはせん毘尼藏びにざうにて三學さんがくにてハ戒學がいがくあり三  
 歸戒きがいをばとちと一五戒ごがいハ戒がい十善じゆぜん戒がい苾芻びしゆハ二百五十  
 戒がい苾芻びしゆ尼にハ五百戒ごがい等とう四分律ふぶんりつ五ご分律ぶんりつ十誦律じゆじゆりつ僧儀律そうぎりつ等  
 に説とたま入いる戒法がいぽうにておまを全ぜんくたりのるハ聖道しやうだう  
 の權化ごんけとる方便ふんぽうの人あり  
 夫おとこより親父おやの教おしにまらせて元手もとてのワタあひ他た力りき念佛ねんぶつ  
 六字ろくじの妙藥めうやく我等われらガ病氣びやうきにてつきり合あます志しあう一いつ元手もとて

ふんげんまゝのりてん

し





津の佐所持の本は安心ほころびた、まき白隠禪師作  
 とりりて明和元年申年十月維西祥光寺藏版とあるよ  
 しとまきも文句にテニハの具畧りるおもむきありい  
 づきたれむれの作あるを遷傳して増損せしむたり  
 べし其一本にも發端の句に○おらら親仁を何國の  
 御入も悉多太子らあふぬが佛らとりふ文句とりと  
 ど其本は沙羅樹下闍提翁の序もりりて維西祥光  
 寺俊風和尚の駁列原の白隠禪師に請して問答の上  
 ○紫の衣の色を耳に見て隻手の聲を目もや聞らん

とらへる道歌を賞して一肩の僧伽梨を附屬して六  
 字の淵源に徹するを證明の時此戲作りりてせみの  
 ころりたることいも委しく記して安永三とせの春三  
 月下句としてりるを京寺町通某書林は津の左ハ  
 もとめたりとしりり目に見耳に聞觀自在の道歌も  
 觀味すべし

古書偽作の書多版りりと雖も是を以て正作とす

平安大行寺 正定閣信曉註之

東京府平民

主

明治廿一年七月廿五日 印刷  
同 年八月十五日 出版

定價五錢

校正兼  
發行者

京都府平民

澤田友五郎

下京區第十九組塩竈町五條通高倉東八



印刷者

京都府平民

西野弥三郎

下京區第三十二組上中之町

善光寺如來傳記圖繪	代全二十冊	往生十樂和讃	代全一冊
一休諸國物語圖繪	代全十冊	孝行和讃	代全一冊
一休狂歌西問答	代全一冊	宗教道志留辨	代全十五冊
白隱禪師施行歌	代全三冊	安心決定鈔	代全十六冊
高祖十思辨	代全十二冊	親鸞聖人一代記圖繪	代全十二冊
六字ノ標言	代全八冊	蓮如上人一代記圖繪	代全十五冊

發賣書林

京都五條通高倉東八

澤田友五郎

關提老翁 白隱禪師述

大行寺僧都 正定閣信曉註釋

# 安心淫まじのたきの註釋

一名佛法ちよんくれ

愛知書林

梶田文光 版

白隱和尚畧傳

師名ハ惠鶴號ハ白隱駿列原の人あり幼多き時より僧の地獄の苦患を説を聞て大に恐怖し是より出離を求むる心あり遂に邑の松蔭寺に入て出家す是よりより東西に行脚して志きりに耆徳の門をうかぐふ後信列の正受老人に参して身心を打失す悟後の修を修して大に宗風を振ひ門下に十餘員の智識を得たり實に近世の活僧あり明和五年十二月十一日寂す壽八十四 勅して神機獨妙禪師と謚す

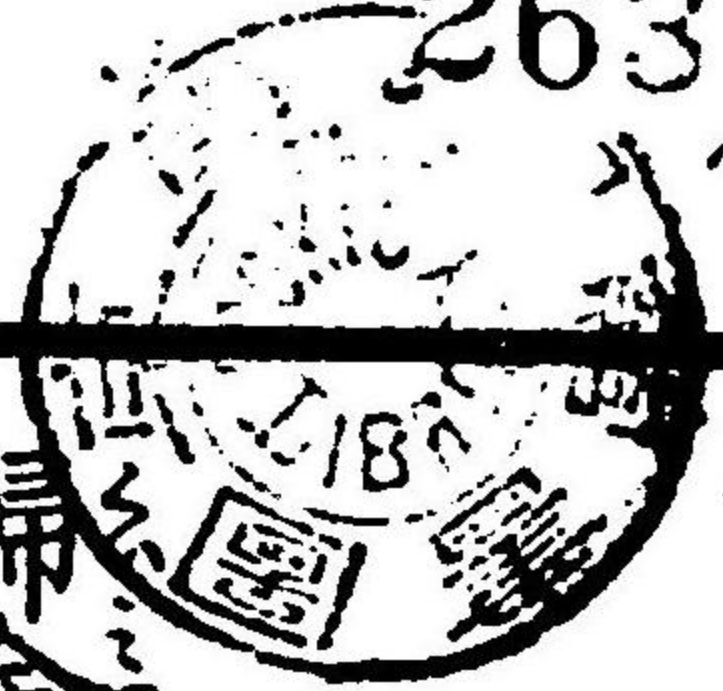
安心ほこりなくき註釋

闡提老翁 白隱禪師述

大行寺僧都 正定闡信曉註釋

歸命頂禮御釋迦如來やましく皆さん聞てもくんわへおもう親父を何處のお人も悉多太子り知らぬが佛の若い時うら商の好ひて親の讓の家も位もすほんと打すて十九の年やう山へはいらて阿羅邏迦蘭の二人の仙人師匠と頼みて菜摘水汲薪を煮るを本宮勤めり元手をこころへ十二年日に初めて店出し華嚴と名けり





安心ほとりたき註釋

闍提老翁 白隠禪師



大行寺僧都 正定閣信曉註釋

歸命頂禮御釋迦如來、やましく皆さん聞てもくしねへ  
あらぐ親父を何處のお人も悉多太子り知らぬが佛の  
若い時うゑ商ひ好きて、親の讓の家も位もすほんと打  
すて十九の年、山へはらりて、阿羅邏迦蘭の二人の  
仙人師匠と頼みて、菜摘水汲薪を撫て奉公勤め、元  
手をこゝらへ十二年目に初めて店出し華嚴と名けし

大行寺僧都

結構は代呂物賣てみられど、文珠普賢の二人は買たら  
餘り高くて、其餘のお客は盲か聾か、見向もせぬわら

註小曰く十九出家三十成道初頓華嚴日照高山の七  
處八會の説法にて、三界唯心染淨同體心のほめ別

法なり佛と衆生と差別ありとの佛説にて、そは眞智  
本覺圓明の妙覺果滿とて、唯佛與佛の智見談

あるがゆへに、果分不可説乃法門あきば、因入たる輩  
に何りては、聾のごとく、啞のぶとくと舍利弗も滿願

子もその頓教にん入か、つりこもあ

是るんいのぬと、分別仕替て、鹿苑町へと宅替めされて、

阿舎と名け、安物賣のけ口上捨き、店先せわしお

客がくるや、得意が付やら

註曰く、聽衆は華嚴の會座を立去て、山の麓の鹿  
の住ける鹿野苑まで逃たると、追かけ留て、長阿舎中

阿舎雜阿舎増一阿舎の小衆教する、苦集滅道の十六  
行相を説た、春日龍神の謠にて、小機の衆生

の益あまきを、御次瓔珞細懐乃衣とぬ  
ぎ鹿幣三衣を着しつて、四諦のまろりを説た、

鹿野園も、あくなれやと猿樂歌の文句られたり  
 そこて追々代呂物仕入て商ひ手廣ふ方等般若に法華  
 や涅槃とが客の機を見て、そましくあてがふ商ひ上手  
 に、須達長者と呼るく、金持と多らふ惚こま

註小曰く、一代佛教ハ多門ニマシキマシクあれども  
 説のごとくに行ずれば解脱をうるあり法相宗のご  
 とまへ、有空中の三時教をたて、阿含等の小衆を有教  
 とし、諸部の般若を空教とし、華嚴深密等の諸大衆經  
 を中道教とし、唯識唯心の一理を成して、轉迷開悟

す三論宗のぶときまへニ藏教をたて、聲聞藏を小衆  
 とし、菩薩藏を大衆とす生滅去來一異斷常の見とを  
 ぶまへハ不の正觀を達するを佛果とす俱舍宗のご  
 とまへ俱舍論三十卷を本論として、斷惑修道の相を  
 明すに聲聞ハ四諦を觀ト三生六十劫ありて四向四  
 果をうる縁覺ハ十二因縁を觀ト四生百劫の修行を  
 へまへ相成道すると談するあり成實宗のごときまへ  
 三衆の道位をあらすむ七賢七聖の位を判ト十八有  
 學九無學の二十七賢聖の位をたて小衆中にねりて

空門を明せる宗あり

祇園精舎と名高い屋敷を、お釈迦ふあてづひ犬店開け  
バ早速其名が諸方へ廣くりどつもあひ程商ひ繁昌  
天上天下に一人の親玉譽てもくもわく

註に曰く四月八日誕生の時一指を天よさ一指を  
地よさして天上天下唯我獨尊三界皆苦我等安之と  
とみくたぢふいしまつぐりたる文言あり

その時賣出す妙法の精薬法華の一法盛んに流行てお  
若い嬢さん龍女と申ぐ之を買うけどろくろ吞込成佛

おされと

註に曰く龍女成佛ハ法華經の第五卷女人の五障を  
を説たまいし提婆達多品あり娑竭羅龍王の女八歳  
よなるもの忽然の間に成佛せしと變成男子具菩薩  
行即往南方無垢世界座寶蓮華成等正覺と説てある  
これなり

ふらー此人文珠の化物智慧があらぬつらさなりも開け  
た我寺が鼻とんどゑらい違ひだ

註に曰くあちのつらとん實類の衆生をいふ竜女の

つらとん

権化の人あること、法華經の諸未註にて、分明ある事  
とあり

又々其時韋提希夫人と申せし女中の智慧も元手もさ  
つばりなりのに阿闍世と申して不孝な御太子提婆達  
多と心を合せて、親もお釈迦も仕舞てのけろと頻婆沙  
羅王牢屋へをー込憂目と合せて、そとで韋提へ不樂闍  
浮と、此世を厭ふてわたしのやうあり、五障三從重き病  
ひの直る薬が、あるあつ下されお願ひまうすとお釈迦  
に向つて、送りにたのめ、お釈迦の合点五三の桐がよ、

此様にお客が大のつらろふと、己前父君浄飯大王其外  
一門勧め吞せて、極樂浄土へ送り居けし、秘密の妙方甘  
露で煉わげ平等大悲乃大事の奥の手、大切も秘ゆへ、四  
十餘年のなごの月日をお蔵へ納めて、だつあつ置たが、  
さらば是のら賣のけまふゆると、法華の商ひいづらく  
休んで、阿難目連二人の手代と左右にりー連れ、王宮さ  
しこふ出現おされて、韋提希夫人の彌陀の本願他力乃  
念佛五劫兆載思惟の薬味、諸佛菩薩や六度の行まで、  
一つに合せと六字の丸薬、一向専念男の女、産前産後

もき合とござらぬ智慧も元手もござらばうりうりあいの口  
 にまらせて唱めるたうりだとうで其方の心想事成羸劣未  
 得天眼智慧が強弱で元手の足らぬお脈も見ゆる  
 三毒重病きいて難治の極重惡病是くの病にり是より  
 外に用ある薬の決しておのぞくお勧るあさきと章  
 提の元より五百の侍女まで無始よりこのわく積り  
 罪業煩惱疑惑の積気の持病に三世の諸醫師も匙を投  
 たり大病ありぐ其場で現益阿耨多羅く汗の流れ  
 て即日平愈何とぬあさん六字の丸薬不可思議妙法梵

語とそのまゝ用ひてみあさる元手のつらぬ肝心要  
 めだ餘り無造作で祖父婆々たきりの古代呂物かちち  
 つくり疑がひ何ぞ利口な物にならうと知識不問たふ  
 直指人心見性成佛が釈迦が即ち堯爾と笑へば迦葉  
 がはらとと笑ふて受賣是が本法一嗣相傳さくりの眼  
 を開いて見たきふお釋迦も我等も是へ何物本來面目  
 無一物とへたりや又どあふの掘出ものだと座禪を始  
 めてやりかけましたが膝がぶろくおり付ますやう  
 睜ぐるやう背中をどやされ犬さまお目玉爰が何で

一ノハニト...

ハ

も辛抱どころと氣張て見くまふ三年昔に隣へか  
たの黒豆三合糠一升思ひ出して忘念山へ是れ我等  
が是でいいうあひどや我等

註云曰くその段へ靈山法華の會座を没して王宮に  
降臨して觀經を説きたる法華念佛同時の義をいふ  
たるものあり次に禪法の成トグくまをいへるん頭  
淨土方便化身土文類の六に善導大師の定善義を引  
て立相住心尚成ト難ト何に死や無相離縁と名とり  
る虚空の舎を立るたとへのごとく達磨の傳法ハ教

外別傳は文字をたえずた心地に修行して本  
來の面目をまのり自己の本心をわらうと成佛す  
商賣音と真言秘密などの様な物だと尋ね見られ  
ば阿字不生で自身の胸にも阿字が備わり羅字ハ元  
より差別と分きて五智も五大もこの胸一つで父母の  
腹から生れし處に金胎兩部の大日法身直に佛の位で  
んすと聞よりそのまゝおんりおまやべいをやりか  
けくまぐも元手も持すに自力の商賣して見るやうな  
るばうげぐらして阿字や羅字やさらなり知らず

安心法こりたくニ

ひろくで圓頓妙法蓮華の即身成佛さても無上の妙劑  
 あきくも丸讀解行ハ我等が下根不及びもあひ故題目  
 をめりの看版くくみるトヤ出る息げりて、功徳ハ分ふ  
 ぞ、元手があいのう丸でハ買ひ、四十餘年の未顯真實  
 何の事だと尋ねて見くまば、六字を廣げ、法華經ハ軸  
 故に六字ハ法華の肝要、經の畧にて藥王品にハ妙典  
 ハ軸吞くむ時、西方極樂阿彌陀の淨土へ生じて行  
 ぞと説て、何れも勘定廻りて、遠道せりより、  
 路銀のつちあひ、南無阿彌陀佛ですぐ不往のゴ、一げん

近みちなんと皆さんぞうでハあいうへ

註小曰く妙法蓮華經第七卷藥王菩薩本事品第二十  
 三のとらに ○如來滅後五百歲中若有女人聞是經  
 典如說修行於此命終即往安樂世界阿彌陀佛大菩薩  
 衆圍繞住處生蓮華中寶座之上文とらる佛説を  
 まんどらるぞへみあさんまわへ鼠ころもで夕飯く  
 ハずよニ食で暮して戒行とらるハ始末勘畧利口算  
 用さる〜我等ハ蚤も虱も取らざらや置わへ手さば出  
 して盗みハせねども心にほく〜て錢金持〜、嘆もあ



けきん子種こねがふくなる、嘘うそも少すくいにつかねをあらぬ、  
酒さけものまわらば嫁入よめいり婚むかひとり振舞あまその外あま世間よが渡わたりぬ何  
と是こゝで五戒ごかいも持もてぬこもへ尚なほさへ買かつてがすくあひ  
店みせのさびるが、世界よのちあどよこまかをやりて賣うひら  
がるあふ息子あしこも比丘ひしうさまむすめも尼にさまむすめ役町やくちやうや  
く坊主ぼくしゆのこまで、田地でんちも作つくらば酒屋さかやもあけきば、和尚おしやうも  
嫁入よめいりの媒酌まいたくもりるすひそまてふ世間よふ人種ひとねあくなる、  
人間にんげん世界よがつぶまきくしあふぞ、とて我等われらに自力じりきのち  
きあひしやうと思おもへど根氣ねきと元手もとてがあくてへ出来できふ

註ちゆに曰いくよの段だんハ律宗りつしゆをりふたりよのふり律りつハ三  
藏ざうのあらにそへ、毘尼藏びにざうにて三學さんがくにてハ戒學かいがくあり、三  
歸戒さんきがいをはとちと、五戒ごかい八戒はつがい十善戒じゆぜんがい苾芻びしゆハ二百五十  
戒かい苾芻尼びしゆにハ五百戒ごぱくがい等らう四分律ふぶんりつ五分律ごぶんりつ十誦律じゆじゆりつ僧儀律そうぎりつ等らう  
に説とたまへる戒法かいほふにて、あきを全ぜんくたひて、ハ聖道しやうだう  
の權化ごんげとる、方便ほうべんの人ひとあり  
夫おとこより親父おやぢの教おしにまらせて元手もとてのりちあひ他力たうりき念佛ねんぶつ  
六字ろくじの妙藥めうやく我等われらが病氣びやうきにてつきり合あます、ちち元手もとて

いふまゝのこりこゝき

し

が澤山ちるあふ自力の商ひなさまそごらうと細い元  
 手であきあひ仕かけ棒でも折らる逐地も去地も茶  
 の木の畑でお迷ひあさるぞむかへ吐しを聞てもみあ  
 さい十方諸佛がお釈迦の證人文殊普賢や後佛の彌勒  
 もたーかに受とら諸宗の祖師たち智恵と元手が澤山  
 あきども六字の丸薬ねすてらなされぬまうて我等ハ  
 智恵も根気も元手もなひかへ自力の足あへ他力のお  
 船に乗より外あへ令別ぶさうぬ凡夫がそのまゝ佛に  
 ありとい石や瓦が不思議に變トて黄金とあるのづを

れが嘘あふ三昧發得なさまそね方に尋ねてごるトろ  
 何とみあさんうきしんごんがぞ儒道や神道心學あん  
 どがあきあひ敵まや色々さるるぞ惡口ゆふとも我等  
 が親父の仕來り商ひ格段違ふことさうひものだよ根  
 元本店天竺横町それから唐土日本へ見世だハ宗九  
 宗と商ひ繁昌弘めと代呂物ひやだくと云たうそごらよ  
 居られぬ恐れおほいが聖徳太子や菅公楠家の歴々さ  
 までもお用ひなさるゝ夫が中にも織田の信長妙法蓮  
 華のはこをあひうせ軍をあされて大方天下ハ治りた

まども、信心堅固の元手があらうやうく一代明智の謀叛みさろなりしまうた、まあすも恐れ、いられぬけれども権現さまへは、六字の九薬軍の中でも、お用ひあされて、欣求浄土の御簇をお立天下をおびりせ、四海を泰平御世万々歳と、あつぎあそびす、何と云をさんごぞんと、あつぎあそびのあいぞく、是をいさん、手本にあされて六字の九薬家内へすゝめて、朝夕不断に忘れず用ひは、仕事しあつぎ、罪障消滅闇夜の歩行もおそれあいぞく、四海静々、現當繁栄子孫の長久今世の祈禱

も來世の利益も、是に過たる薬のあつぎ、嘘のつらねつごきみをお釋迦の味噌でいごさうぬ、本法のことたよほつら

註に曰く天親菩薩法執あり、白隠和尚法執あり、白隠ハ今世の大菩薩ありとつらべ、此戲作あるものハ予、僧徒、信濃生國美濃大垣にて少年十二三才のとき、大野屋佐助とつら老人の心學道話の信者ある人に口うつらにわくつらき、わがへあまたるを、今更六十七年の後に思ひ出して、註述するりのあり、又大阪

女いごころのき

津の佐所持の本は安心ほころたき白隠禪師作  
とりりて明和元年十月維西祥光寺藏版とあるよ  
こも文句にテニハの具畧あるおもむきありい  
づきたれむれの作あるを遷傳して増損せしむたり  
べし其一本にも發端の句に○おらが親仁と何國の  
御人も悉多太子らあふぬが佛らとりよ文句ありと  
ぞ其本は沙羅樹下闍提翁の序ありて維西祥光  
寺俊風和尚の駿列原の白隠禪師に謁して問答の上  
○紫の衣の色を耳に見て隻手の聲を目よや聞らん

とらへる道歌を賞して一肩の僧伽梨を附屬して六  
字の淵源に徹するを證明の時此戯作ありて世の  
とりたることくも委しく記して安永三とせの春三  
月下旬としてあるを京寺町通某書林にて津の左ハ  
もとめたりといへり目に見耳に聞觀自在の道歌也  
觀味すべし

古書偽作の書多版ありと雖も是を以て正作とす

平安大行寺 正定閣信曉註之

明治廿二年十月十五日 印刷  
同 年同月廿五日 出版

定價五錢

編輯兼  
發行者

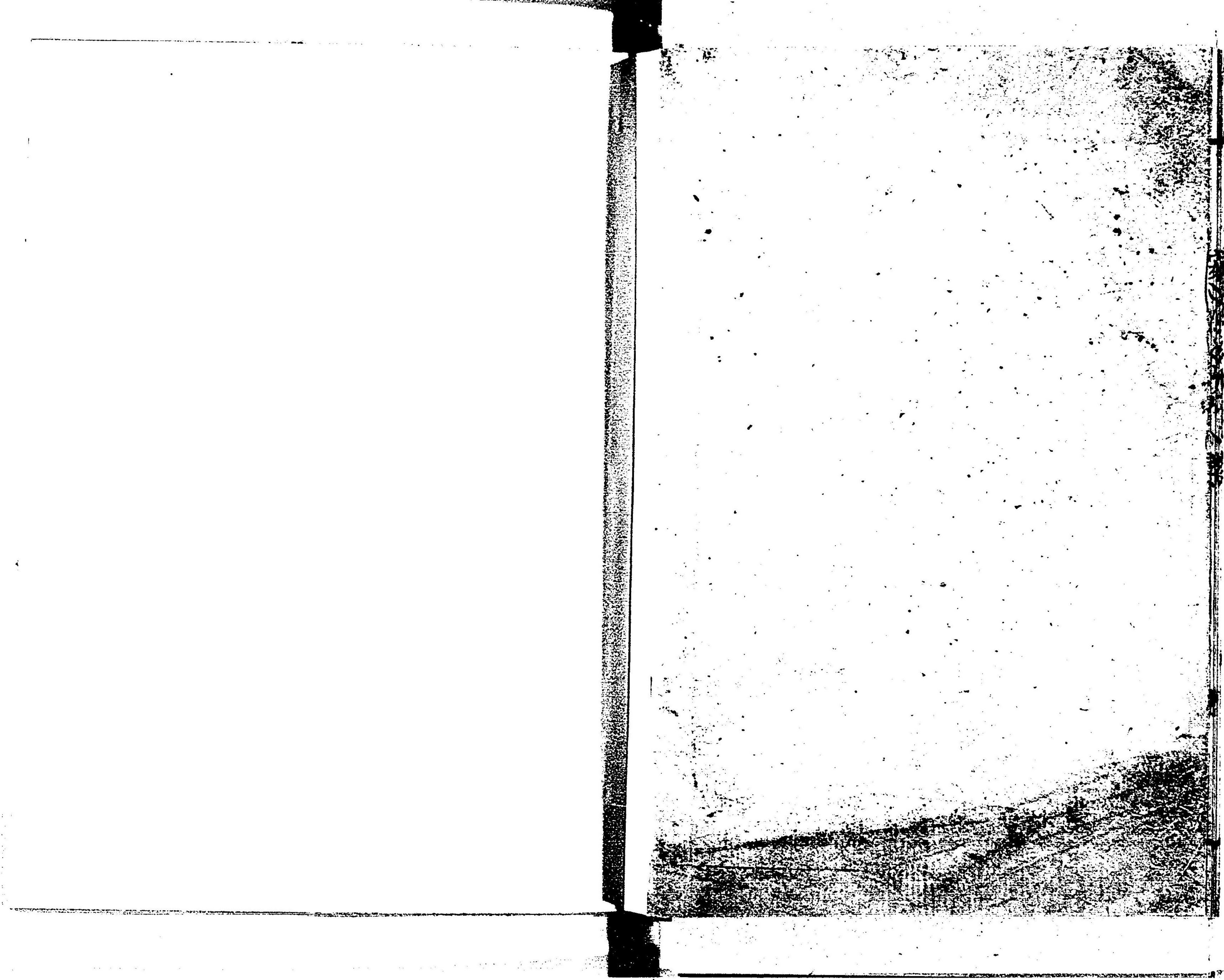
愛知縣名古屋市鉄砲町廿三番戶

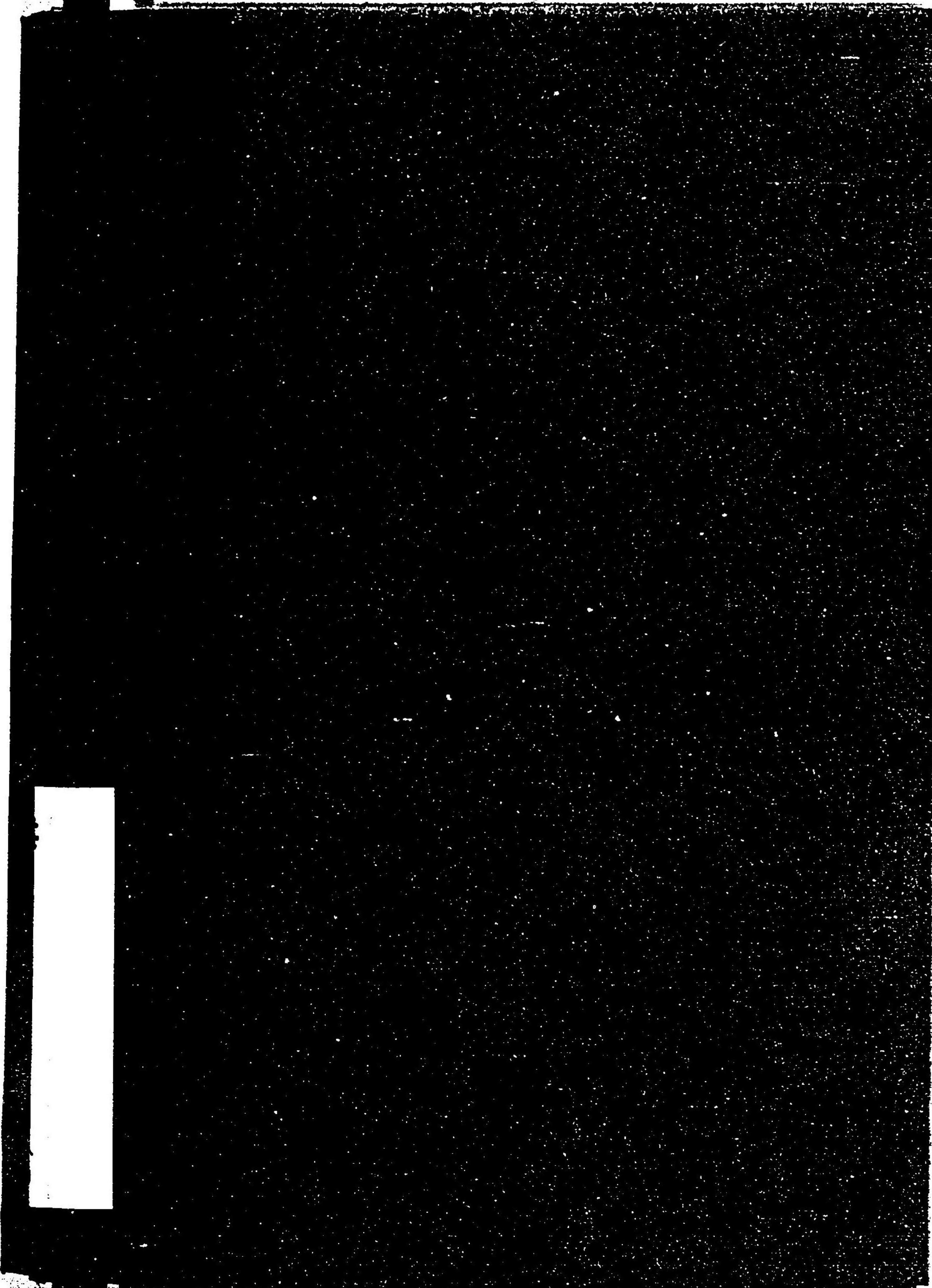
梶田勤助

印刷者

同縣同市門前町三百十七番戶

山田慶一





特55

263

安心ほこりたき註釈

国立国会図書館

019322-000-1

特55-263

安心ほこりたき註釈

白隠禪師／述

M21.8

ABG-0008

